

茶の湯 文化学会 会報

第119号 / 2023年12月22日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

No.119

茶道具を「活かす」楽しむ仕掛け

後藤さち子

本年、昭和美術館設立者の後藤幸三（一八八一～一九七七年）ゆかりの茶碗や和歌に関する作品をあらためる機会があり、幸三が自身

の所蔵する茶道具を使い、様々なアイデアを楽しんでいたことが印象に残った。自身のコレクションを保存・研究・公開することを目的に美術館を設立した幸三が、自らの趣味を活かして茶道具を楽しんでいた様子についてご紹介させていただきます。

昭和美術館は開館四十五周年を迎えた私立美術館である。当館のコレクション点数は約八百点で、コレクションの基礎となっているのは、設立者幸三が妻はな（一八八九～一九六五年）や父の安太郎（一八五九～一九三六年）とともに明

治二十年頃から昭和三十年代の間に収集した茶道具と書画である。

三人が収集した作品の取得年代を追ってみると、茶道具を入手し始めるのは幸三とはなが結婚した明治四十三年である。このことから、嫁入り前から茶道を趣味としていたはなが茶道具収集のきっかけを作ったことが伺える。幸三夫妻の共通の趣味であった茶の湯であるが、はなは尾州久田流の茶を修めていたと言われる一方、幸三

は茶の湯を誰かに師事すること無く、茶事での点前は、はなに任せでいた。

幸三は歌人・佐佐木信綱氏（一八七二～一九六三年）に師事したようで、和歌を詠むことは幸三の趣味であった。このことから古歌

を学習することと古筆の鑑賞とが一体となり、古筆切や和歌集などの古写本を収集している。

幸三が趣味である和歌と茶道具（茶の湯にふさわしい掛軸を含む）の収集や活かす方を一体として楽しんでいた様子が伝わるのが、自身の所有する茶道具の写しを制作し、時には箱に自作の和歌を書きつけて親しい人へ送るといふものである。

例を挙げると、昭和十三年、父安太郎の回忌茶会の記念品として安太郎が愛用した「安南茶碗銘『宝珠』」（ベトナム・十七世紀）の写しの制作を横井米禽に依頼し、「安南写し茶碗 銘『安泰』」を制作している。

写された茶碗はベトナムの土を



図1 「安南茶碗 銘『宝珠』



図2 「安南写し茶碗 銘『安泰』

使い、かたち、色味にいたるまで忠実な写しとなつては、この写しの制作にあたっては、和歌の「本歌取」のような手法でアレنجを加えている。本歌である銘『宝珠』では側面に「天下萬年」と書かれているところを、写しである銘『安泰』では「天下安泰」と変更している。これは、父安太郎の幼名泰次郎と襲名の名安太郎から一文字ずつ採ったもので、文字も故人の筆跡を使い、故人を偲ぶ仕掛けがなされているものである。

「本歌取」とは、「周知の和歌の表現を意図的に取り入れて、新しい和歌を詠む技法。」(『和歌文学大辞典』、『和歌文学大辞典』編集委員会編、(株) 古典ライブラリー社、二〇一四年)であり、本歌取の利点は、本歌の内容や情景などを連想させることで、新たに読まれた和歌がより広がりのある内容を含むことができることである。この「安南写し茶碗 銘『安泰』」の場合、「本歌取」することで、茶会の参会者へ故人愛用の茶碗の

すがたを通して故人を偲んでほしいという気持ちとともに、落ち着かない世相の中「天下安泰」を祈念する気持ちを代弁させている。また、和歌で大切にされるのが、和歌の詠まれた季節や場面などの状況や経緯、出典を記述した「詞書」という文で、詞書が示す情報は、和歌により鮮やかなイメージを付与することとなる。幸二は、

あたかも詞書のように所蔵する茶道具に関連する文や画賛などを添えて、茶道具にイメージを付与することをいくつか試みている。

掛絵「千代能図」円山応挙筆(江戸時代中期)には、「我家所蔵の千代能筆の幅を一緒にするとよいと思う」とメモを残している。この千代能筆の幅とは、掛書の「独



図4 「独悟歌入消息」



図3 「千代能図」

この他にも、「清拙正澄筆墨蹟」(鎌倉時代末期)には松平不昧が朽木昌綱に宛てて書いた、清拙

悟歌入消息」無外如大禪尼筆(鎌倉時代・弘安二(一二七九)年)を指すと思われる、無外如大禪尼と千代能が同一人物であるという伝承をもとに、千代能のすがたを描いた絵によって、書跡に筆者のイメージを付与することを考えていたようである。

正澄の墨蹟について言及している文を添わせて一組としていたり、松平不昧作茶杓 銘「ひとはな」（江戸時代後期）に不昧自画賛の「梅の枝画賛」（江戸時代後期）を添わせて一組としていたりする。これらの作品はそれぞれ別のルートから入手されたものであるが、添わせる文や絵は茶道具と何らかの関連がある作品が選ばれ、茶道具にストーリー性を付与している。

また、少しおもしろい視点だと感じられるのは、幸三が所蔵品の本歌と同形・同意匠で、本歌より後の時代に写しとして作られた作品を入手し、コレクションに加えていることである。一点は「青磁犬鷹香合」（明時代末期〜清時代初期）という本歌と、仁阿弥道八作の「青磁犬鷹香合写し」（江戸時代後期）を入手したものである。他に「青磁袴腰香炉」中国龍泉窯（南宋時代十三世紀）という本歌の同形で三代清鳳与平作「秘色磁

香炉」を、「祥瑞梅形茶碗」（明時代末期〜清時代初期）という本歌と加藤民吉作の「梅形茶碗染付写し」（江戸時代後期）などを所有していた。これらの本歌はどれも中国で作られ日本にもたらされた物であるのに対し、写しの方は日本の陶工によるものである。古い本歌に学びながら創作された和様の写しを本歌とともに楽しんでいくようにある。

茶道具のコレクションにおいては、写しを制作したり別のルーツを持つ作品同士を組にしたりと楽しんでいく幸三であるが、もっとも力を入れて収集したのが和歌に関する書である。当館の書のコレクションは和歌に関するものが多く、幸三は和歌切、卷子本などは大正六年頃から昭和三十年代まで入手を続けていた。しかし、これらの和歌に関する書については新たに組を作ったり、写しなどの制作をしたりはしていないようである。このあたりからも、自由な楽

しみ方を許容する茶の湯を自分流に楽しんでいた様子を感じることができている。

ただし、別のルーツを持つもの同士を組にしたものについては、手書きの小さなメモから発見したものである。茶道具は所有者が使ったり改変したりすることで物語が作られてきた物も多くあり、今後そのような楽しみ方がなされてゆくことと思う。箱書や添状など由来や改変を示す情報については、保存、研究の上でははつきりと墨書で残してほしいと感じている。

茶の湯文化学会

創立三十周年を迎えて

歴代副会長より

「茶の湯文化学会での活動を振り返って」

小泊重洋

茶の湯の素養は殆どありません。

ん。一九九四年十一月、偶然、陝西省・法門寺で倉沢先生にお会いしたのが、本会参加のきっかけでした。自然科学と人文科学融合の素材として、お茶は最適のものと考えていました。倉沢先生もそのようにお考えだったのか、入会間もなく身に余る大役を仰せつかりました。京都に行き来するうちに、お茶には大きな世界が二つあることを実感しました。茶の湯の拠点京都と茶産業の拠点静岡です。そして、水と油的な差異も感じました。静岡の茶業者は茶の湯には全く関心がありません。そして、茶の湯関係者も茶産業には関心がないことに気づきました。お茶席で、「お茶名は」「お詰めは」と出ても、その先はありません。どこかのだれがどのようにしてお茶を作っているかには関心がうすいようです。日本学術会議が認めたお茶に関わる学術団体に日本茶業学会（元日本茶業技術協会）と本会があります。十数年前ですが、両

者の名簿を比較したことがありません。個人会員数はほぼ同じく七百名弱。茶の生産に関わる研究者や技術者で構成される当時の日本茶業技術協会では静岡県の会員が三十三%を占めていたのに対し、茶の湯文化学会の会員は九名のみ、全体の一・三%。両方に所属するのは私だけでした。なんとか、静岡の茶業者に茶の湯への関心を呼び起こそうと、静岡例会を立ち上げ、講演会やシンポジウムを開きました。まずは、茶文化とは何かから始めました。茶と人との関わりともいわれますが漠然としています。国や県の茶業振興計画に茶文化振興をうたっていますが、茶文化の定義が不明確なため具体策はありません。台湾からも演者を招き「茶文化とは何か」というシンポジウムを行いました。答えは得られませんでした。やはり「茶業と茶の湯」というシンポジウムも開きました。両方から多くの人が参加すると思ったのですが逆で

した。沢山の論文集が残りました。ご希望があれば差し上げます。女性の研究者が多いのも本会の特徴です。そこで、「女性研究者による茶文化研究発表会」も行いました。バラエティに富んだ良い論文集ができました。あれこれ異質な活動を行ってきましたが、多くが中途半端になってしまい責任を感じています。茶があつてこそその茶の湯です。もう少し茶産業にも関心を持ってくださることを望みます。茶を通じて大地と自然を感じるはずですよ。

「副会長経験者として」 高橋忠彦

私は中国文化の研究から、茶との関わりを持ったので、セネカの言葉 *Soleo enim et in aliena castris transire, non tanquam transfuga sed tanquam explorator.* (私は他の陣営に入り込むことを常としている。それは逃亡者としてではなく、探険者としてである) が、

私の茶の湯文化学会に参加したスタンスを暗示しています。茶の湯文化研究の関わりは、あくまでも中国研究という、外部からのものであったのですが、それが一時期は副会長を務めたのですから、この学会は懐が深いと言わざるを得ません。

私が副会長を務めた経緯については、倉沢先生への弔辞として会報に載せたことと重複しますので省略します。ともあれ、倉沢先生の構想された学際的な茶文化研究を、中国研究の立場から補佐したことは事実です。その成果については、皆様の評価に委ねますが、国外で催行する研究会は、倉沢先生以降にも受け継がれ、参加された会員の視野を広げるという効果を得られました。学際的な視点は、今後の学会運営にも反映させてい

ただきたいと思います。私もいつまで研究生生活を続けられるかわかりませんが、この機会に、学際的な研究による成果と

は、どのようなものか、一例を挙げて御説明したいと思えます。この度、『浙江の茶文化を学際的に探る』なる論文集を編んで上梓しましたが、ここでも論じたように、唐代に於いて「盃」と「甌」の形状と容量が異なるという陶磁史の見解（これは水上和則先生の成果です）が、陸羽の『茶経』の読み込みを深め、陸羽が「盃」を用いて、坐客に美味な茶を、繰り返して、坐客に賑やかな舞ったという、重要な問題が解明されました。また、陸羽に対するかのように現れた、白居易が「甌」を用いて悠然と飲む茶は、後世の文人の茶に方向性を与えたのです。

この成果は、『茶経』の読解に基づくことも忘れてはなりません。「若坐客数至五、行三盃、至七、行五盃（坐客が五人なら、盃を三回巡らし、七人なら五回巡らす）」という一節は、過去には誤読されていましたが、それは「行」の漢字の意味が「客の間に巡らす」

だということを見落としていたからです。このような読解を積み重ねることで、陸羽の喫茶法を体系的に復元し、それに基づいて考えたわけです。文化史研究の方法は様々ですが、テキストを重視するという側面は、今後も尊重されるべきだろうと思います。

「東海例会の歩み」 神谷昇司

副会長としての提言などはありませんが、東海例会の歩みを掲載していただければ幸いです。神崎さんがすでにまとめて提出頂いていると思いますが、かなりの量ですが、一つの例会の歩みでかなりの茶の湯学会の流れも把握できると思います。勿論東海例会は、戸田宗安先生の熱意で佐藤豊三先生、神崎かず子先生と私で立ち上げた例会です。現在は昭和美術館後藤さち子様、徳川美術館加藤祥平様、岩崎理事もメンバーになっていたいております。また今年

度から年一回昭和美術館で野立て茶会を企画しております。よろしくお願いいたします。

「一世代を経た学術団体なら ではの活動を」 田中秀隆

創立三十周年という節目を迎えるにあたり、創立二十周年を記念して刊行した『講座 日本茶の湯全史』（中世・近世・近代）の当時の谷見会長の「刊行によせて」を読み返した。

「本講座が刊行されることにより、より多くの方々の茶の湯に対する関心が深まり、また茶の湯文化研究の学問的な市民権が確立されることになれば、学会としてこれに勝る悦びはない。」と結ばれている。「茶の湯文化研究の学問的な市民権が確立」が、十年前の学会の悲願であったことが思い起こされる。振り返ってみれば、ささやかながらこの共通の課題を意識して研究を発表してきたのか、

と思いきこせる仕事もないわけではないが、所詮、個人のできることはない、限界がある。

個人の限界を意識してか、この十年で、新たな茶の湯研究の団体も生まれてそれぞれの活動を行っている現状を、「より多くの方々の茶の湯に対する関心の深まり」と、まずは肯定的に受け止めている。

一方、茶の湯文化学会は、茶の湯研究の団体の中で唯一の学術会議の登録団体であることから、「茶の湯文化研究の学問的な市民権が確立」という課題に対して、引き続き正面から向かい合う責任を有している。

あらためて、学問の発展はどのように担保されるかという問題を歴史的に考え直してみれば、新たな知見に対して、集まって広く議論する組織が、「学会」であった。ある問題を真剣に検討すればするほど、研究者間で、違った見解が生まれてくるのは、当然のこと

である。違った見解だからといって、それに耳を塞ぎ、発言を封ずるのではなく、同じ土俵に立って相互の見解を披瀝し合うことが、学問の発展を支えてきた。

その歴史に鑑みれば、茶の湯文化研究に学問的な市民権が与えられるかどうかは、茶の湯文化研究において同じ土俵に立って相互の見解を披瀝し、発展させる場が存在するかどうか一つの試金石となる。

自身は研究を行わない会員にとっても、真剣な議論の行われる場に立ち会える権利を有することが、その会に所属する魅力と映るのではないだろうか？

それが可能な場は、「茶の湯文化学会」をおいてない。そのことをより自覚して次の十年に進むことが、次の世代の研究者そして、茶の湯文化研究の理解者を増やしていくことにつながると考えている。

創立三十周年にあたり、十年前

からの未完の課題を再確認する形での提言に代えた次第にご賛同いただければ幸いです。

(就任順)

理事会

令和五年度第一回理事会在、九月十七日(日)午後二時よりZoomミーティングで行われた。理事十六名が出席し、以下の議題について討論がなされた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、令和五年度総会・大会の報告
- 三、会誌・会報について
- 四、その他

五、令和六年度総会について

第一議題では、令和五年度各地例会について、担当理事よりそれぞれ報告が行われた。

第二議題では、令和五年度総会・大会の報告が、山田副会長より行われた。参加者は百七十九名。見学会の参加者は五十九名であつた。

た。

第三議題では、会誌について山田編集委員長より、会誌四十号の進捗状況が報告された。また、会誌の「会誌投稿規定」の変更の件の提案があり、現行「三、体裁

原稿は縦書きとし」とある箇所を、「三、体裁 原稿は縦書きを原則とし、必要に応じて横書きも認めらるる」に、「四、提出 電子メディアで原稿を提出する場合は、プリントアウト紙を二通添付する」とある箇所を、「四、提出(この部分

削除)」と、することが承認された。この件は、総会審議事項となる為、令和六年度総会議案とする。

会誌の電子化については、他学会においても電子化が検討されており、当学会においても、編集委員会においてたたき台を作成し、来年度中には理事会に提出する。

会報について船阪理事より会報一八号の進捗状況が報告された。第四議題では、広報活動について、チラシの作成の件は会長・副

会長で内容も含めて協議し、今後とも依田理事にデザインを担当してもらう。

第五議題では、令和六年度総会・大会について、開催日程は令和六年度六月、会場は同志社大学今出川キャンパス。シンポジウムのテーマは、次回理事会までに詰めるようにする。また見学会・懇親会も行う方向で進めて行く。

令和五年度第二回拡大理事会在、十二月三日(日)午後二時よりZoomミーティングで行われた。理事・幹事十四名が出席し、以下の議題について討論がなされた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、令和六年度総会について
- 三、会長候補選考委員会の編成について
- 四、理事・幹事 役員人事について
- 五、会誌・会報について
- 六、その他

第一議題では、令和五年度各地

例会について、担当理事よりそれぞれ報告が行われた。

第二議題では、令和六年度総会・大会について、開催日は令和六年六月八日(土)・九日(日)。会場は同志社大学今出川キャンパス(会場とZoomのハイブリッド開催)。シンポジウムテーマは「近世における武家相応の茶の成立と展開(仮)」。見学会は大徳寺芳春院。懇親会も開催が決定した。研究発表者は募集とし、詳細は後日ホームページに掲載することとなった。

第三議題では、会長候補者選出に関する内規に従い、新会長候補の選考を行うよう、会長候補選考委員会委員に、岩崎正彌理事、田中秀隆理事、美濃部仁理事が選出された。次回理事会までに委員会を開催し、会長候補者を選出し、総会にて決定することが決まった。

第四議題では、中村順行理事より退任願が出されたが、留任をお願いすることとなった。また、神崎かず子幹事より退任願が出さ

れ、承認された。

第五議題では、会誌について山田編集委員長より、会誌四十一号の進捗状況が報告された。表紙の装幀について、次号よりデザインはそのまま、色指定は印刷会社と相談することとなり、四十一〜五十号のサンプル、また横組み用のサンプルが提示された。会報について飯島理事より会報一一九号の進捗状況が報告された。

第六議題では、役員名簿の作成について、会長・副会長が変わった段階で作成することが決まった。各地例会のIT化について検討していくこととなった。

例会

東京例会

(令和五年十月十四日)

「『茶経』に関する二、三のこと」

岩間真知子

これまで「日本における陸羽『茶

経』の受容について」の研究を続け、(1)陸羽の没年を明確に記す五山版『隆興仏教編年通論』陸羽伝の紹介、(2)日本において描かれた陸羽像、(3)茶の湯書に見える陸羽『茶経』、(4)煎茶書に見える陸羽『茶経』、(5)『五山文学全集』に見える陸羽『茶経』として成果をまとめてきた。

今回は『五山文学全集』と『五山文学新集』の中から、陸羽『茶経』を読み込む詩文を抜き出し、その作者や背景から、日本人がどのように陸羽や『茶経』を受容してきたかを具体的に探ってみた。栄西が入宋してより中国とは数百年におよぶ僧侶の往還があり、かの地の僧侶たちとの詩の応酬、また茶の贈与などを通して、陸羽や『茶経』の知識も得ていった。さらに来日僧からも学び、詩画軸を作成するなどの五山僧の集まりでも情報を共有する。かれら五山僧が土佐、甲斐など地方に行くことでも茶と共に伝播していったであ

ろう。つまり江戸時代の和刻本『茶経』以前に、陸羽『茶経』は、五山僧に限られた教養あるエリート集団ではあったが確実に受容されていたと詩文から理解できた。ただ彼らがどの叢書中、あるいは独立刊本の『茶経』を見ていたかは不明のままである。

次に陸羽の著した『僧懷素傳』を通して、日本で陸羽が知られた可能性を指摘、三番目に杏雨書屋所蔵の竟陵本『茶経』を閲覧したところ、錯簡などから後刷りと見られること、挟まれた付箋の書付から、武田長兵衛氏が昭和十二年十月に古書店より購入したと推察されることを述べた。

「初代根津嘉一郎の青山本邸の茶室」

下村奈穂子

実業家・初代根津嘉一郎(一八六〇〜一九四〇)は、根津美術館の礎となる東洋美術のコレクションを形成するとともに、蒐集した

茶道具を用いて、茶会を催した。その主な舞台となったのが、明治三十九年(一九〇六)に購入した青山南町の敷地である。記録に残る青山本邸での茶会は三十四会を数えるが、これらの茶会が催された茶室は、昭和二十年の空襲により全て焼失してしまった。

そこで、本研究では母屋と敷地の図面、雑誌などに掲載された茶室の写真、そして高橋箒庵などの手による嘉一郎の茶会の記録をもとにして、失われた茶室の配置や間取りを明らかにすることを目的とした。

その結果、嘉一郎の青山本邸での茶会の舞台として、主に「大広間」「八畳の間(景文の間)」「六畳の間」「撫松庵」「撫松庵 寄付」「牛部屋」「無事庵」「弘仁堂」「弘仁堂付属小間」「斑鳩庵」「斑鳩庵 付属広間」「斑鳩庵 寄付」「変千木庵」の十三の茶室が確認された。これらの茶室の変遷をみると、嘉一郎の茶の湯自体が徐々に変化

していったことがみてとれた。Ⅰ期（一九〇六～二三）は、主な茶室の建築と試用期間にあたる。Ⅱ期（一九二三～二九）は、嘉一郎が自身の茶の湯を実行し始めた段階で、その新たな試みとして後段付き茶事を行った。Ⅲ期（一九三〇～四〇）では、後段付き茶事に加えて、書院茶を始めた。

つまり、嘉一郎の茶の湯とは、歳暮の茶に見られる草庵の侘茶を基盤とし、そこに、所蔵の名品を披露するために、後段や書院の茶が追加されたものであった。

東海例会

（令和五年九月三十日）

「天目について」

九代長江惣吉

宋代（九六〇～一二七九年）には抹茶の喫茶文化が盛行した。その抹茶は、現在の日本の抹茶とは製法が異なり白色をしていたため、中国各地の窯では白い茶が映える様々な黒釉茶碗が作られた。

その中で最高の評価を得たのが福建省・建窯の建盞であり、その最高傑作が曜変である。曜変は南宋宮廷で使用されていたことが南宋の都だった杭州の宮廷遺跡から二〇一〇年、二〇一六年の二点の曜変の出土により判明した。

宋代には建盞の評価が非常に高かったため、宋～元代にかけて建盞を真似た黒釉茶碗を焼いた「建窯系」の窯が福建省周辺には数多く出現した。建窯系の茶碗は粗笨なものも多く相互の窯の弁別が出来ないものが多いが、建窯系の東張窯（福建省福清市東張鎮）には胴部が内反する特有の形状のものがある、そのタイプは福岡や鎌倉の遺跡からも出土しているが、鎌倉後期の一三〇〇年頃から瀬戸で製作が始まった瀬戸天目においても写されていたことを筆者が指摘した。

この他に、建窯系の一つである茶洋窯で作られ、後に日本の侘茶で称揚された灰被天目の技術的特

徴と、唐～元代の中国の茶碗の形状の変遷が、中国の茶の種類と点法、喫茶法の変化に則したものであったことを実物資料により説明を行った。さらに筆者は天目茶碗の実制作者であり、各種古典の再研究の意義と、そこから展開した過去には無い新たな陶芸創造の重要性を示した。

近畿例会

（令和五年八月二十六日）

「茶人から考える『南方録』の成立背景―『南方録』と『沢庵和尚茶器詠歌集』のササ耳―

岩田澄子

『南方録』のササ耳茶人はこれまで研究対象とされず、現物すら不詳だが、細長い形で、カネワリ（曲尺割）の秘伝を持つ重要な存在となっている（会「柵」「台子」「墨引」）。一方、沢庵が江月和尚

に贈ったという『沢庵和尚茶器詠歌集』は、陶器製の茶入五種の一つがササ耳で、沢庵や江月はササ

耳を重要な茶人と認識していたといえる。ただし『南方録』と『沢庵詠歌集』はササ耳の形が違う。

『南方録』のササ耳とは何か。そのヒントが『大正名器鑑』第二編「漢鶴」の「雑記」に記されていた。

昔堺に大鶴・小鶴という名物茶入があり、「漢鶴」は小鶴に相当する。一方、『万宝全書』の「時雨（旧名、雛鶴）」が大鶴に相当し、これも漢作唐物の耳付き鶴首と判明した。秀吉が聚楽第で「時雨」と改名し、形も釉薬も秘伝だったが、盆点の図に書いてあり判明したという。

大鶴（時雨）は『南方録』、小鶴（漢鶴）は『沢庵詠歌集』のササ耳と形が似ている。沢庵と江月は堺と縁が深いことから、堺の禅僧達は堺の名物（大鶴、小鶴）を念頭に、耳付き鶴首を「ササ耳」と呼んでいたと推定される。

『南方録』のササ耳茶入に関する記述と、「会」に笑嶺和尚（天正十一年没）が正客の会が多数あ

り、『南方録』が記す利休参禅の師は笑嶺であること（「覚書」「墨引」「滅後」）を考え合わせると、これらの部分は立花実山の創作とは考え難い。実山が編集した『南方録』の成立背景には、堺由来の特有な先行資料があったと考えられる。

「松平伊賀守のコレクション」 宮武慶之

上田藩主松平伊賀守家は、片輪車蒔絵螺鈿手箱（国宝。東京国立博物館蔵）をはじめ多くの美術品を所蔵したことが知られる。しかしながら同家のコレクション形成は資料の不足から明確にされていない。

新たな資料として同家の茶の湯道具の蔵帳である『御手許御道具覚』（上田市立博物館蔵）に着目した。本蔵帳は、わずか七十八件しか記載がないものの国宝二件、重要文化財一件、重要美術品一件を含む。道具の来歴を大別すると

宮廷及び將軍からの拝領品、江戸の材木商冬木屋上田家旧蔵品、土浦藩主土屋家旧蔵品となる。特に冬木屋本家旧蔵の中興名物の多くが伊賀守家に移動していた。

宮廷及び將軍からの拝領品は初代藩主松平忠周にもたらされた。特に「片輪車蒔絵螺鈿手箱」や「千歳蒔絵硯箱」（藤田美術館蔵）は八代將軍徳川吉宗からの拝領品である。冬木屋旧蔵品は茶会記の検討から主として三代藩主松平忠順の入手、土屋家旧蔵品は同家からの流出が従来、寛政期とされる点から四代藩主忠済の頃に入手されたと考えられる。

従来、伊賀守家旧蔵品には一部に一閑貼の箱や朱漆書が確認され、これらの筆跡は忠済によると判断した。つまり次第を整え作品を愛でるといふ行為は、忠済と同年齢であった松平不昧とも共通する。さらに貴重なコレクションを歴代を通じて行なった伊賀守家は、従来知られていないものの美

術史、茶の湯文化史において重要であると結論した。

例会のご案内

術史、茶の湯文化史において重要であると結論した。

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

- 東京例会
令和六年二月十七日（土）
（会場：未定・会場とZoomのハイブリッド開催）
午後二時～
- 「益田克徳の茶とその周辺 その五 所蔵品と茶会記」
神保乃倫子・八木京子
「織田有楽について」
西山 剛
- 令和六年三月十六日（土）

（会場：埼玉会館会議室3B・会場とZoomのハイブリッド開催）
午後二時～

- 「元伯宗旦文書」寛永十年四月二十七日付・宗受宛書状（仮）
荒井欧太郎
- 「千利休をめぐる茶書の歴史」展を振り返って（仮）
峯岸佳葉
- 近畿例会
令和六年三月二日（土）
（会場：同志社大学 今出川キャンパス 至誠館S2）
午後二時～

- 「江戸時代中期の千家伝来茶書にみる露地の作庭について」
八尾嘉男
- 「宗及茶湯日記（天王寺屋会記）」に見る戦国期の茶の湯の諸相
山田哲也
- 北陸例会
令和六年三月十六日（土）

(会場：富山市佐藤記念美術館)

午後二時～

『生成―Life is beautiful』展 富
山の現代工芸作家について』
中川康子

金沢例会

令和六年三月二十四日(日)
講演会(詳細未定)

高知例会

令和六年二月二十五日(日)
(会場：高知県立文学館 慶雲庵
茶室)
午前十時～正午
茶の湯関係文献を読み所感の発表
「地域の茶人に学ぶ Ⅲ」

新刊紹介

『浙江の茶文化を学際的に探る』
東アジア海域叢書8
高橋忠彦編著 汲古書院
定価九、九〇〇円(税込)

『古伊賀―破格のやきもの―』

五島美術館企画・監修 淡交社
定価二、六四〇円(税込)

お知らせ

令和六年度総会・大会の
ご案内

令和六年度総会・大会を左記の
日程で計画中です。詳細は令和六
年四月に郵送・ホームページにて
ご案内いたします。
令和六年六月八日(土)
見学会：大徳寺芳春院
懇親会：東華彩館

令和六年六月九日(日)
総会・大会：同志社大学

今出川キャンパス
シンポジウムテーマ：…

「近世における武家相応
の茶の成立と展開(仮)」

令和六年度大会発表者募集

令和六年度の研究発表者を募集
します。発表を希望される方は、
大会研究発表用概要書式を添え
て、学会事務局までメールもしく
は郵送でご応募下さい。大会終了
後、発表内容をベースとして論文
にまとめ、学会誌『茶の湯文化学』
に投稿していただけるような発表
をお待ちしております。

開催日程：令和六年六月九日(日)
応募資格：茶の湯文化学会会員で
あること

募集締切：令和六年二月十一日
(日)
発表時間：研究発表二十分
質疑応答十分

・メールにて、件名を「令和六年
度大会発表募集」とし、大会発
表用概要を添付してお申し込み
下さい。
・応募の際は連絡先のほか、現在
の所属先、肩書等もあれば、併
せてお知らせ下さい。

・応募多数の場合は、審査の上決
定いたします。

・詳しくはホームページをご覧下
さい。

・その他ご質問等ございましたら、
学会事務局までお問い合わせ下
さい。

※事務局の年末年始の休業は、令
和五年十二月二十八日(木)～
令和六年一月八日(月)となり
ます。

※年会費未納の方は、至急払込み
くださいますようよろしくお願
いいたします。

